

# ikeco

“住む人が主役の家づくり”に、もっとファンを！

2019  
Vol.32

“完璧な住まい”への

追求から生まれた

熊本で初のパッシブハウス





We Love Natural Life! 2019

空設計工房

熊本県熊本市



最近では新たに住宅を建てようとするお施主様も、ある程度の建築やインテリアの知識を持たれているケースが増えています。また、更に省エネ建材や仕上げ材の良し悪しにまでこだわった住宅を求められた場合、コストや工期が許す限りは、できるだけお施主様の要望に応えたいものです。今回ご紹介する住宅には、省エネ建築診断士の資格を持っているお施主様と、省エネルギーのパッシブデザインの住宅設計に取り組んでいる建築家のこだわりが詰まっていました。

一級建築士事務所 空設計工房の江藤眞理子さん、施主のSさんに聞く



#### パッシブデザインの省エネで快適な家

近年、住宅内の光熱費を減らすための工夫や、電力を始めとするエネルギーをつくり、循環させるシステムなど、住まいにおける省エネルギー化が一般的になってきました。しかし、日本は四季による気温の変化が大きく、また湿度が高いことで住宅の省エネルギー化が簡単にはいかないことも少なくありません。そんななか「パッシブハウス」という家づくりが注目を集めています。パッシブハウスは、ドイツパッシブハウス研究所が定めた性能認定基準を満たした高機能な省エネルギー住宅にだけ許される呼び名です。日本においてもパッシブハウス・ジャパンという建築家や省エネ建築診断士などが所属する団体が、日本の気候や文化様式に合わせた「日本型超省エネ住宅」の研究と普及を目指して活動しています。パッシブハウスは、住宅を建てる地域の気象データを元に、日射やそこで必要になるエネルギーを計算し、年間暖房負荷を15kWh/m<sup>2</sup>に抑えながら、快適な生活環境を生むための最適な設計を導き出すことがポイントになります。

「単純に空調を効かせて無理に快適性を保つのではなく、太陽の光や熱、窓を開けた時の風など、自然環境を上手く取り入れて、光熱費をなるべく抑えつつ気持ちよく暮らせる空間づくりがパッシブデザインの基本的な考え方です」

そう話すのは、福岡を拠点に省エネで快適な注文住宅やリフォームの設計を手がける、一級建築士事務所 空設計工房の江藤眞理子さん。江藤さんのパッシブデザインと、バウビオロジーという「健康な住まいを求める学問、建築生物学・生態学」をベースとした住宅づくりは、住環境に対する感度の高いお施主さんから年々、設計依頼が増えているとのこと。ただ、パッシブハウスの基準を完全に満たすためには、当然ながら建築の初期費用がかかってしまうこともあり、日本での事例はまだ少ない現状です。

## 住宅づくりに妥協しない施主との出会い

パッシブデザインの家づくりに取り組む江藤さんが、今回ご紹介する「S邸」のお施主さんと出会ったのは、パッシブハウス・ジャパンでの交流を通じて。Sさんは以前、東京で暮らしていたものの、東日本大震災を期に、夫婦とも実家のある熊本への移住を検討していました。

「熊本の実家のある地域が、季節による寒暖の差が大きく、また湿気が多かったこともあり、学生時代に一人暮らしを始めてからずっと、過ごしやすい快適な家へのこだわりが強かったのです」と話すSさん。動めていた広告代理店の仕事を辞めるタイミングで、省エネ建築診断士とインテリアコーディネーターの資格を取得したと言います。

「とにかく快適で、“完璧な家を建てたい”という思いがありました。私の言う完璧な家は、カビが生えにくいことや乾燥しにくさ、良い空気がある空間をイメージしていて、それを実現するために東京でも色々な工務店の説明会を主人と一緒に巡っていました。快適な住宅を勉強していくうちにパッシブハウスのことを知って、熊本に移住してからの仕事のことも考え、資格を取ることにしました」(Sさん)

Sさんが江藤さんに設計を依頼したのは、パッシブデザインを追求していたことに加えて、自然素材を住空間に取り込んでいたこと、そして快適な空気環境づくりにこだわりを持っていた点に共感したため。

「江藤さんに要望したことは、断熱性や気密性、換気といった住宅の機能的な面が主でした。住宅に関する考え方が、あまり女性的じゃないねと言われる。インテリアのテイストは後から変えることができるけれど、建材や機能・性能は簡単には変えることができないので、時間をかけてつくっていきました」(Sさん)





### 良い空気が贅沢なインテリアになる

S邸が建つのは、Sさんのご主人の実家の隣にある元は駐車場だった場所。約610平米の敷地に対し、約114平米の2階建てが計画されています。外壁は漆喰塗りと焼き杉板張りで、南側に向かって縁側や大きな開口が設けられ、縁側の前にはお子さんが遊ぶ砂場や植栽のある庭が広がります。「外壁の仕上げには漆喰を使いたいと思っていました。外壁は、時間と共に汚れや色の変化が出てきますが、漆喰だとその変化が自然で、汚れていっているという印象がなかった」というSさん。特に家の顔となっている南側には大きな庇があるため、直接の強い雨が当たるリスクが少なくなっているのもポイントです。屋内に入ると、無垢の木材を用いた建具やオリジナルの備え付け家具に囲まれた玄関。その先に、夫婦2人に4歳と1歳の子供2人がメインで使う吹き抜けのリビングダイニングがあります。ダイニングには対面式の大きなキッチン、リビングには小上がりの和室が隣接し、家族の顔を見ながら過ごせるスペースとなっています。また、和室とリビング、仕事部屋、寝室すべてが南側に配置され、それぞれに大きな窓が設けられているのも特徴。南に大きな開口をつくることで、冬には暖かさを確保する一方、夏は木製アルミクラッドの日射取得型トリプルガラスで断熱しつつ、屋外の庇や、ガラリ雨戸、室内の障子建具が暑さを防ぎながらも外光の明るさを取り込みます。「和室を家の北側に設けているケースを見かけますが、あまり使わなくなってしまうことが多い。メインで使うスペースをすべて南側に配することで、空気をつなげながら家族が自由に快適に過ごせる場所を模索しました」(江藤さん)





障子は吉村障子と呼ばれる大きなグリッド状のものを採用した他、畳敷きの和室が和の雰囲気を感じさせながらも、大きな開口からの光と、開放的な吹き抜けがモダンな印象を生んでいます。壁の仕上げは無垢の木材とともに、珪藻土やオガファーザーのウッドチップクロスを採用。パッシブハウスはエネルギー効率を向上させるために高い気密性を確保する必要があり、室内に良い空気環境を求める江藤さんは、天然成分が主成分でウッドチップクロスの吸放湿性を持った同製品を使うことが多いそうです。また、化学物質の影響がなく安全性の高い素材を使うことで、Sさんが子供たちと安心して過ごせる環境づくりにもつながっています。

更に、少しの熱も無駄にしないようにするために導入されているのが全熱交換換気システム。排気する空気から熱と湿気の大部分を給気する空気に戻すことで、換気で外に出ていく熱が少なくなり、光熱費を抑えることにもつながるものです。窓を閉め切った状態で、湿度は夏が60%、冬が40%と快適な状態を保っています。空調は約105平米の1階の床下に1台、吹き抜けでつながった約51平米の2階に1台のエアコンが設置されていますが、ほとんど

使う必要がなく、冬場も1階の床下エアコンで十分暖かくなるとのこと。

「家にいるのが一番心地良くて、外に出たくないほど。生活の9割くらい家にいるかもしれません(笑)。パッシブハウスやパッシブデザインの住宅は、初期費用は掛かるかもしれないけれど、ランニングコストを抑えることができ、エネルギー消費を減らして地球の環境に貢献しながら生活できるというもの良い。インテリアの家具にこだわるよりも、空気にこだわることのほうが贅沢と言えるかもしれない。完璧で非の打ち所がない家ができたとと思っています」(Sさん)

「省エネの住宅は、空気や熱、光、気流など、目に見えない要素を数値化して設計に取り込む専門的な知識が必要です。その一方で、CO<sub>2</sub>排出量や光熱費削減といった環境を意識する思想的な面も持ち合わせています。建築家や施工をする側がそれを理解することで、パッシブデザインの住宅の考え方が広まってほしいです」(江藤さん)

住空間において、快適に過ごせることや良い空気は、見た目の美しさ以上にこれからの時代にますます価値が高まっていくであろう重要な要素です。お施主さんの関心や希望に応えるためにも、省エネの家づくりのための専門知識や、快適な環境づくり実現する自然素材など情報を蓄積しておきたいものです。



空設計工場の江藤眞理子さん(左)と施主のSさん